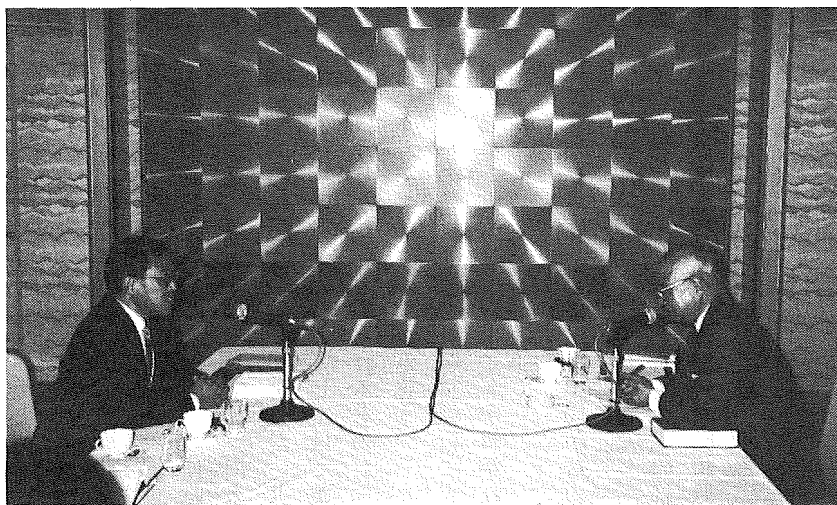


日本の文化を語る

第1回

古代日本人の他界観

考古学から見た葬制



齋藤 忠（さいとう ただし）

明治四一年宮城県に生まれる。昭和七年東京大学文学部国史学科卒業。京都大学考古学研究室助手、慶州博物館館長、文化財保護委員会主任調査官、東京大学教授、大正大学教授を歴任。文学博士。

現在 大正大学名誉教授・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所所長。

〔著書〕

『日本古墳の研究』（昭和三六）『日本古代遺跡の研究』（昭和四六）『考古学史料集成』（昭和五四）（以上吉川弘文館）『日本装飾古墳の研究』（昭和四七、講談社）『東アジア葬・墓制の研究』（昭和六二、第一書房）ほか。

杉山 林継（すぎやま しげつぐ）

昭和一五年一月 千葉県に生まれる。昭和三七年 国学院大学文学部卒業。昭和四二年 同大学院博士課程修了。現在 国学院大学日本文化研究所主事。助教授。神道考古学専攻。

〔主要論文〕

『入山峠』（昭和五七）軽井沢町教育委員会

『祭と葬の分化』（昭和四七）日本文化研究所紀要二九。

司会 神道文化会は戦後混乱の時期に、日本の文化の正しい伝統を学問的に展開して行かなければならないという考え方でつくられて、もう四十年を過ぎております。これまでは学術的な論文集の出版とか、神道文化に関する各種の活動を顕彰する仕事を中心にやってきておるんですが、こんど新しく『神道文化』という、これは徳川^{トクガワ}統理^{トウリ}さんが、言葉の響きもいいし、もともとの精神なんだから、そういう題で、出来るだけ広く読んでいただけるような雑誌を出したいという考えがありました。その第一回に斎藤先生をお願いしたわけです。

「神道文化」という言葉そのものが、人によってはいろんな解釈の仕方があるわけですが、ここではあまりそのことにこだわらせずに、広く日本文化の本質的なものがどういうもので、それがどんなふう^{どう}に展開してきたのかということを、考古学の立場からお話しただけがあればありがたいと思います。杉山さんも考古学専門ですので対談という形でお願ひ出来ればと思っております。

杉山 先生、おいそがしいところをどうもありがとうございます。

いま司会のほうから話がありましたけども、その中でも特に斎藤先生にはたくさんのご著書がありますが、先生は、ちょうど日本の一番問題になってくる古墳時代が最も

お得意のところかと思えますし、日本だけでなく朝鮮半島、中国大陸と、実際に博物館にお勤めになったり、調査に行かれたこともあるわけですね。

そこで今日はいまの日本文化に強く関係してくる古墳時代を中心に、アジアの中での位置、あるいはまた、仏教もこの頃日本に入ってくるわけで、入ってきた仏教で変革されていくもの、変革されない部分、そこらへんを中心にお話しただきたいんじゃないかと思えます。

また、ちょうど先日御大喪も行なわれて、先生ずっと陵所の儀までご参列ということも伺っていますので、その時のことなど少し混ぜていただいてもよろしいんじゃないかと思っておりますが、考古学の資料を最初にして、さらに神話や古代伝承を通して見たもの、あるいは死者の祭りとか祖先祭祀とかも少し順を追ってお話し願えればと考えまして、先生の多くのご著書の中でも、ごく最近の、『東アジア葬・墓制の研究』というご著書の中に神話のことなどもたくさんお触れでございまして、このご本を手元にもってまいりましたが、このようなところを中心にと思っておりますので、よろしく願ひします。

斎藤 そうですね……私から、はじめに自分が葬制というようなものを勉強するようになった動機とか、それからどういような研究の変化があったかとか、そのようなこ

とからでも申し上げながら……。

杉山 はい、よろしく。

斎藤 実私は私、昭和七年に大学（東京帝国大学）を卒業しました。国史学科だったのですが、考古学の論文を書きかけたのです。ところが審査の先生方は、黒板勝美先生とか、辻善之助先生とか、みな文献の先生だし、考古学では……というようなことも言われまして、では考古学を生かしながら、文献も使って、というようなこと。そうしますと、葬制というのが一番うまく行けるのではないか。いわばそこには墓というようなものも考えながら、全体の葬制の問題をといて次第で、論文の題を「本邦古代に於ける葬制の研究」ということにしまして、それでよからうということになりました。



そんなようなことで、最後の一年間は猛烈に勉強したのですが、やはり考古学は何とでも資料は集められますが、『古事記』『日本書紀』『万葉集』とか、いろいろな古文獻をその時真剣に勉強して、そういう中から葬墓制に関する資料を引っ張りながらやってみたわけなのです。どうやら卒業出来ましたが、

それ以来、もう六十年近くなったわけですが。一つの卒業論文が一生の研究に付き纏うというようなことを耳にしていますが、まあ自分なんかその一人でないかと思うんですが、卒業後も、むろん考古学のほうで、古墳などを中心に勉強してまいりましたが、その後、朝鮮半島のほうにまいり、もっと古代東アジアの葬制、墓制というようなものを広くやらなければいけないということを感じたわけなのです。それからだんだんと中国の各地を旅行するようになった。そういう旅行でも、いつも葬制、墓制という問題を考えていました。たとえば吐魯番トルファンのあたりの現代の墓を見て、その遺骸の方角はどうかというようなことを聞きました。回教ですから、メッカのほうに頭を向けるんです、という返事も、自分ながら勉強になったわけです。

そういうようなことで勉強していますが、いろいろと墓制を中心にして葬制を考えると、まだまだ分かんないところがいっぱいあるわけなんです。いったい葬制のルーツとは何か、あるいはそういう日本の固有の葬制と東アジア全体の葬制との比較、どういうように位置づけられるのか。その後、仏教が入って、どう変化があったのか。あるいは儒教、神道、それから自葬というようなもの、まあそんなようないろんな問題を考えてみても、まだまだ分からないところがありますので、これから、もっともっと勉強した



いと思っています……。

杉山 やっぱり、それぞれの国の特徴ある文化を探し出すのは、もちろん衣食住でも出てくるんでしょうけれども、考古学の上からいきますと、お墓のほうを見ていくのが一

番はつきりと出てき易いものなのでございましょうね。

斎藤 そうだと思っんですがね。というのは、いわゆる衣食住やなにかは、一つの物質文化にすぎない。ところが墓というのは、精神文化に関連するんですね。精神文化、精神生活を知らなければ、墓の研究というのは出来ないんではないかとぼくは思っんです。そういう点で、単なる物的なものでなくて、もつと心の深いものを考えるというようなことでも、非常にいい研究の課題だと思っんですね。

ただ、とかく世間では、冠婚葬祭で、結婚とか華やかなものに研究の眼も注がれて、どうも厳肅な最後の行為である葬制というのが、とかく疎んぜられているというのを残念に思っているんですね。

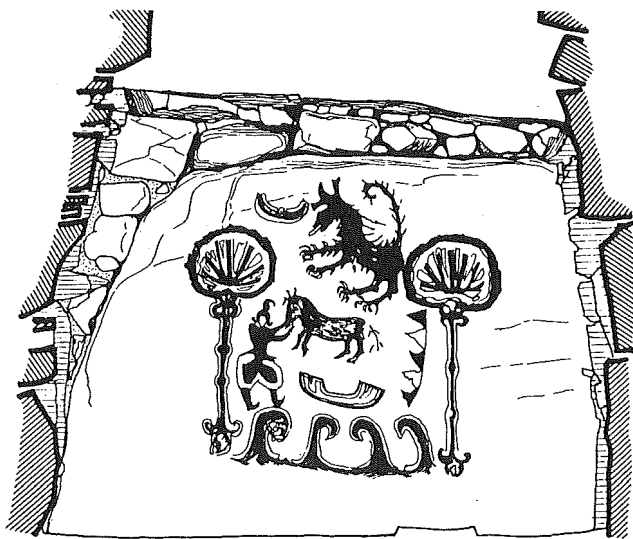
高塚と厚葬

杉山 お墓というものには、いろんなものが込められてくるわけで、精神生活といえますか、死後の生活というものの——それは結局どう生きるかということにも繋がってくるんでしょう。先生はたくさん各地の例を見られておいですが、世界中どこの民族でも、高塚を造るということがいつ頃出てくるか、厚葬の風がどう出てくるかというのも一つの問題でありますし、平面形も、普通ですと円か四角が多いと思っんですけど、日本には前方後円墳などの形がありますし、そのへんのことを、少し……。

斎藤 そうですね……まあ盛土をするというような場合に、二つのやり方があると思っんです。一つは、遺骸を、掘って埋める、そこに余分な土を上にかバーする、それも一つの盛土だと思っんですがね。それからもう一つは、意識的に高く塚を盛り上げる。そういう二つがあると思っんです。前のほうの、自然に土を盛り上げて、おのずから塚のような形をなしたというようなものも、当然日本でも考えられると思っんですが、むしろ意識的に高く塚を盛り上げたというようなこと。これが問題なんですね。

で、その形式の一番簡単なのは、円だと思っんです。子供が砂遊びをしても、ついまるい形で盛り上げるというような、同じようなことでないかと思っんです。

それから最も整ったものとしては方形ですね。方形の場



竹原古墳の奥壁

合には、遺骸を納める棺とか、槨とかの四角、長方形、そういうようなものに最もふさわしいものだと思うんですが、それから、こんどの昭和天皇の御陵もそうなんですが、いわゆる上円下方墳——下を方形にして上を円くする——

というようなものも、そういう円墳、方墳が発達して整備された形でないかなと思うんですね。

そういう中に、いろいろ変わった形もあるわけなんです。たとえば古代朝鮮で、特に現在韓国の慶州周辺に見られるものは、双円墳という、円を二つ続けたものですね。いわゆる瓢塚。実は私、慶州の博物館長をやった時に、この双円墳の謎、なぜこういうふうな瓢塚のような形が出来たかというのをいろいろ研究してみたいです。どうしても分かんなかったんですが、やがて一つの古墳を掘った時に、遺骸を納めた槨があって、畑の下に、それに続いてもう一つの円墳が現われたんです。明らかに双円墳なんです。

そしてその下にも槨が納められていて、その両方の副葬品から調べてみると、一人は男性であり、一人は女性である。だんだんとその例が分かってきて、いまの特有な双円墳というのは、初め夫か妻が亡くなり、その後、妻か夫が亡くなって、円墳を二つ続けた、それがいわゆる比翼塚だということも分かって、現在韓国の学者もそういうようなことで——双円墳を研究しています。日本でも、横穴式石室をそれぞれに設けた、双円墳もあるわけです。ただこれは必ずしも朝鮮半島の影響ではなくて、同じような状態で見られる高塚の形式だと思うんですね。

ところが、先ほどお話しの前方後円墳というのは、二、

三年前から韓国にもあるということが言われておりまして、私も見に行きましたが、やはり日本特有のものだと思ってるんです。そういう葬制なり墓制なりには、古代民族の共通したものもあると共に、非常に強く、その民族、国土の独自性も現われているということも考えなくてはいい。前方後円墳などは、その一つでないかと思ってるんです……。

その場合、起源説がご存じのようにいろいろあるんですね。かつては前方部が祭壇だというようなことも考えられました。現在、ご存じのように弥生時代からの形式がどう移り変わったか、墳丘墓との関係とか、そういう点ではいろんな問題もまだまだ今後あると思いますが、ただ、前方後円墳の場合、後円部に遺骸を葬った場合に、初めにどちらからお参りしたかという問題も残されています。果たして前方部からか、横からか、そういうことを探ってみますと一番根本的な問題は、どの方向に遺骸の頭を置いたのか、この問題も考えなくてはいいかなと思ってるんです。

杉山 前方後円墳の問題はまた後でふれるとして、高塚墳墓、これが日本ではっきり出始めるのは、九州の福岡市早良区飯盛の樋渡遺跡で墳丘があるようなことを言っています。あの樋渡古墳の下から、さらに弥生時代の甕棺墓群が発見されていますが、そこは高塚となっているというこ

となのです。まだこれは報告書がないようですから詳しいことはわからないのですが、かなり早くから高塚墳墓が発生してくるものなのでございましょうか。

(校正している時、長崎県神崎町吉野ヶ里遺跡で弥生時代中期中葉——西暦紀元前一世紀の——墳丘墓が発見され報道されたので見学して来たが、二重に周溝をめぐらせた台状墓で、南北に造り出しを設けており、三十メートルを越す墳丘は地山を削り出すと共に上部には粘土をしつかりと積んでいる。これまで中心付近から六基のカメ棺が発見されその一つからは一鏝の有柄細形銅剣とガラス管玉群が出土し、他の一つからも細形銅剣一本が出土した。いずれも前漢鏡が九州で埋葬される以前のカメ棺例であり、飯盛例よりさらに古い、確実な例となった。)

斎藤 それですが、さっき言ったように高塚といった問題ですね。たとえば初め遺骸を葬って、余った土を上にする。まあ少し余分な土を盛るというようなことが、やはり弥生時代にも当然見られたと思うんですが、そういう場合に、これを古墳と言っているか。まあ高塚には間違いないと思いますが。ですからそういう意味で、古墳、あるいは高塚墓と限定される場合には、自分なんかは、一つの厚葬思想をもって、意識的に築き上げたものだと考えています。いま問題になっている弥生時代の墳丘墓的なもの、それも

あるいは自然の丘陵を利用して、上に盛土のものを築き上げた場合は、これもやはり高塚墓であり、古墳と言ってもいいかもしれませんが、いずれにしても、まずこれが区別されなければいけない。

それと、いまのような、意識的に高く盛り上げた高塚なり古墳なりというような場合、もう一つは、単に遺骸を葬って塚を築くというようなことでなしに、それに伴って、副葬品がどうかという問題もやっぱり考えなくちゃいけないで、副葬品もたくさん納めて、本来の意味の厚葬になった場合が、はつきりとした古墳ではないかと思ってるんです。

杉山 まあそれは縄文時代でも、土壙を掘って埋めてるわけですから、ある程度の盛土が出てくるとは思いますが、そういうものとはやはり違った雰囲気がある。古墳時代は急に出てきたということがよく言われますけれども、一つのエネルギーというか、力がすーっと出てくる、その時がやはり古墳の発生に結びついて……。

斎藤 だと思っんですがね。いまのような方形周溝墓にせよ、やはりある程度の盛土はあったと思うんですよ。ただ副葬品は少ない状態ですし、まあそういう意味では、やはり日本の本来の意味の高塚墓、あるいは古墳というようなものは、弥生時代の流れの下に、何か急激な大きな内部

的な変化、それが爆発した。そして本来の意味の厚葬になったのではないかと思っているのです。

杉山 先生、中国の、たとえばごく古く、殷の墓とか、そういうところだと、地下へずーっと掘っていつて、深いお墓を造ってるようですが、あの墳丘はあまり聞いたことがないんです、これはやはり中国で。墳丘はあまり古くはない——

斎藤 はい。それで実はこんどの本にも書いたんですがね。中国のいわゆる高塚の発生というのはいつ頃かなというの、中国の考古学者もいろいろ研究しているようなんですが、少なくとも秦、漢にはもう完全な高塚が発達したことは明らかですね。その以前をどこまで——まあ春秋、戦国時代あたりに遡るかどうかっていうことですが、その頃から本来の意味の厚葬思想っていうようなものが現われたと思うんですよ。秦の始皇帝陵なんていうのは、本当に山のように大きなものですね。

杉山 そうですね。

斎藤 ですから、そういうような意味では、日本では中国よりも本来の意味の古墳の発達というようなのは遅れるし、その構造にせよ、いろんな意味で、やはり文化的な差がかなりあったこともまた認めていいんではないかと思うんですね、中国の古代の素晴らしい高塚と副葬品、内部

構造なんかもすごいですから。

前方後円墳は日本だけ

杉山 そういうことでは、やはり朝鮮半島にも中国にも、たしかに大きな古墳もあるし、高塚墳があるけども、どうも前方後円墳というものは日本しかない。そして朝鮮半島にあるといわれているものも、どうも違うようですし、はっきり言って、日本の前方後円墳の元になるような古さのものは、どこにもないように私は見てるんですけれども……。

そうしますと、日本列島そんなに広くない中で、東北地方から九州の南まで、前方後円墳という形が分布してる。何千何万という数が分布しているわけですが、それを見ますと、あの前方後円墳という形は、非常に意識的に造られた形であるし、これがたとえば中国大陸にぼつんとあつたとしても、日本の古墳時代の前方後円墳の時代の内にあるならば、たまたまそっちへ行つた人が故郷の墓の造り方で造つたと言つても言い切れるかもしれませんので、今後たとえ発見されたとしても、それほど問題にはならないと思うんですけれども……。そうすると、この日本列島の中にだけ、何でこんなに、まあ約四百年間あるわけですが、分布の初めはそんなに長い時間ではなく散つて行つた、これはひと

つどんなもんなんでしょう。

斎藤 少なくとも朝鮮半島に日本の前方後円墳のルーツ的なものがないことは明らかですね。朝鮮半島のいわゆる前方後円墳となると、その話だけでも時間がかかりますので、まあ別な機会にしたいと思いますが、いずれにしても、最近も西都原古墳群とか、その他、方々の例を見直しても、ぼくは日本の前方後円墳というものは素晴らしい一大土木的な芸術品であると思うんですね。形の整つた典型的なもの。

杉山 そうですね。

斎藤 ただ、これも無計画に、周りからなり遠くから土を持つてきて、ああいうような形は出来ないう思ふんです。そこに非常に整つた、細かい設計でもない。ご存じのようには比例などでも十分研究されておりますが、そういう点では、前方後円墳は古代における日本の一つの特有な墓制文化であり、日本の精神文化の代表でもあり、日本の広い古代文化のシンボリックな存在でないかとも思ふくらいなんです。

杉山 いや、まだいろいろお聞きしたいものがあるんですけれども、こればかりではいけませんので……。

いま九州のお話が出ましたが、先生にも装飾古墳の立派なご本がある。その装飾古墳が九州にたくさんある。そう

すると、中国大陸にも朝鮮半島にも裝飾古墳はあるじやないかという言い方もあるんですけども、しかしどうも九州のものと大陸のものやなにかとは、すぐには結びつかないような気もするんです。まあ高松塚のようなものは、あるいは大陸の影響といいますが、かなり近いものもあるかと思うんですが、九州の石室のを見てますと、一つの地方的な文化というか、何かそのへんが……。まあもちろん影響は受けてるでしょうけども、何か違うんじゃないかというような気もするんですが、

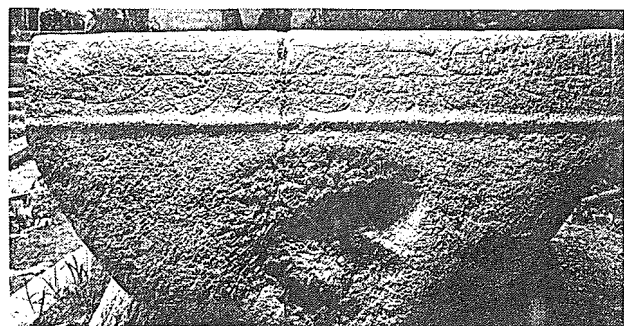
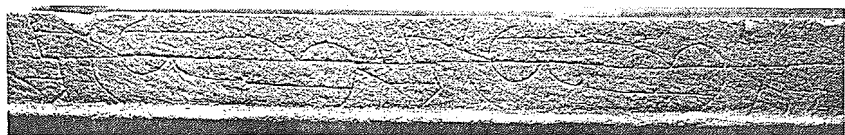
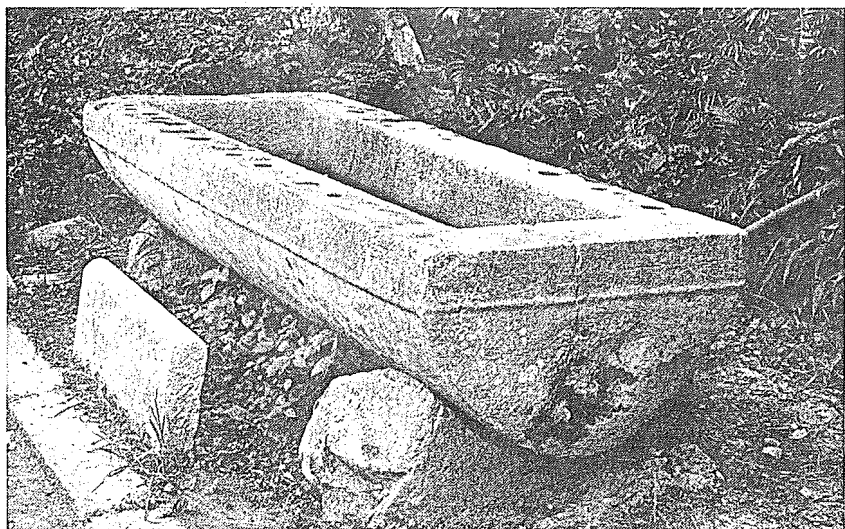
斎藤 ごもつともなご意見ですね。実はこの五月にもう一冊本が——『日本壁画古墳の系譜』という本——学生社から出ることになって、それには少し思い切ったことを書いてるんです。

といいますのは、一昨年、北朝鮮に招かれて行って、高句麗の古墳壁画——実はね、日本の方々、高句麗の古墳は行く機会が恵まれていませんし、韓国の学者もそうなんです。ですから藤ノ木古墳の場合でも、すぐに百済や新羅の関係ばかり。やっぱり高句麗の文化っていうのは素晴らしいんです。そしてそこに古墳の壁画。これは何といっても朝鮮半島の最大のものなんです。そういうものを見ながらしみじみ考えてみたんですが、日本の北九州の古墳の壁画に影響してるというものは、これは非常に僅かだと

思うんです。たとえば竹原古墳とか、珍敷塚古墳、このくらの影響で、むしろ私のこんどの新しい考えでは、やはり最初から日本でそういう影響なしに発達していたんでないか、と。

たとえば大阪の安福寺石棺——石棺に直弧文に似た文様をつけること。それからご存じのように山梨県の丸山塚古墳、あれは石室にね、これはばくも確認してますが、円い赤い文が、石室の遺骸をちょうど納めた両側の壁にある。ああいうのが、丸山塚古墳は前期古墳ですので、そういうものにあるのは、なにも大陸の影響でなしに、石棺なり——安福寺のは割竹形石棺ですが——それからこんどの丸山塚の竪穴式石室なり、そういうものには、日本で既に裝飾的な要素が入っていたんでないかと、そういうことを実は書いてみたんです。まあどのように批判されるかなんですが……。

そして、そういう中から、やがて五世紀の終り、六世紀になつて、北九州と大陸、朝鮮半島との交渉が多い中に、高句麗の古墳の壁画というようなものが取り入れられた。それが、図柄でご存じのように、珍敷塚の場合の月像のヒキガエルですね、あれなんかもう明らかにね。それから竹原古墳の馬を引いてる姿とか、四神の一部ね、そういうものにか現われていないんでないかと、考えています。これも高



安福寺の石棺

句麗の壁画を見て、新しく自信を得たわけなんですがね。

ですから、その点ではやはり大きな大陸の流れというようなもの、日本の古代墓制、葬制にもありながら、日本特有のものも生まれていたと。それは、それぞれの国でも同じようなことが言えるんじゃないかと、まあそんなことだと思っんですがね。

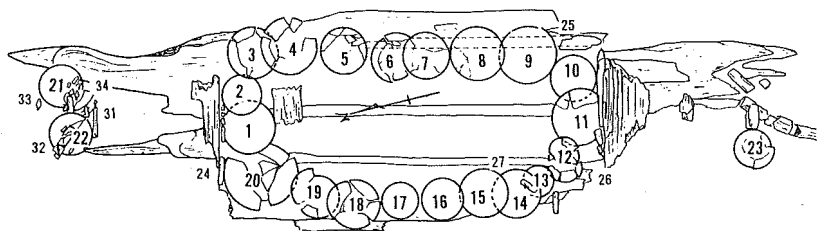
杉山 それはどうしても大きな流れの中では影響力を受けるわけですから、その影響の中で、どういうものを取り入れてくるかという、その取り入れ方も問題があると思っんですね。

少し話がとんでしまいかもしませんが、私も一番気になっていたのは、弥生時代の甕棺からそういう状態が現われるんですけども、鏡の問題なんっていうのは、その典型じゃないかと思っんです。あの物自身は中国の物、大陸の物を輸入してくるというか、移入してくるというか、もたらされたものであるのに、どうも大陸のほうでは、それは鏡に対する信仰がないわけではないにしても、非常に化粧道具的な、実用的な面が強い。また半島でもそのように見えるんです。しかし日本へ入ってきますと、とたんに化粧道具よりもむしろ宗教的なものに、というか、一人の人がたくさん持つてるといふ雰囲気ですぐ出てくるような気がするんです。ですから、物そのものは、自分が作り出したも

のでないものであっても、扱い方が違ってくる。そういう一つの文化の受け入れ方、受け方というものが、やはり日本的な、という言い方していいのではないか、いままでとられていた扱い方ではない扱い方。そしてそれがさらに意味を高めていく——意味合いをふわっと高めていく、そんな雰囲気、半島とか大陸と違ったようなものを造り出す、もともと何か雰囲気的に持っていたんだろうか、と。古墳時代でもずいぶん鏡というものは多数埋葬しますですね。しかも身体の周り、と言うとおかしいですけど、棺の周りに立て並べたりなにかする。あれはまさに扱いがもう違っているという気がするのです。

斎藤 それはもうごもつともで、はつきり言えると思っんです。漢代の場合も、鏡はいわば鏡奩きやうれん——鏡匣にちやんと収めた、いわば化粧道具の一つとして収めている。ところが日本では、もう弥生時代から、中国の前漢の鏡が入ってきて、一つの神聖な宝器、あるいは呪性じゆせいっていいですか、呪的な意味を持つて納めた。先ほどお話しした例で、遺骸の周りに山古墳などは、その最もはつきりした例で、遺骸の周りにずーっと、二十三面ですか、並べてるでしょう。ですから鏡がそういう点では非常によく日本人の精神生活を表わすと思っんです。

まあそのほかにも、神聖な呪性を持つた副葬品というの



天神山古墳の銅鏡の出土状態

『大和天神山古墳』より

が、ご存じのように前期古墳には非常に多いですね。そして中期には石製模造品のような、杉山さんも得意のところですが、そういうものが発達している。こういうところにも、やっぱり日本の大きな特色があると思うんですね。

杉山 たしかにあの前期古墳の石製品にしても、もとは貝の腕輪からだいたい来たんだろうということになってますけども、海に対する何かがあるのかなと私は思ったりすることもああります……。あの貝を忘れ切れずに、弥生時代の貝は——まあ古墳時代にももちろん実際の貝のものもあるわけですけども、そういうものが宝物的に、こんどは石でもって作り出してゆく。青石で作って出てくるということ。これは古墳時代が、弥生時代からずーっと繋がっている部分としては、非常に面白い部分だなという気がします……。

朝鮮半島あたりの墳墓では、そういう宝器的な物というのはどうなんですか。実用品でない……。

斎藤 やはり宝器的なものでしょう。民俗学的にもいろいろ調べられますがね。三つの、鈴とか剣とか玉とか、まあそういうものですが、少なくとも古墳の副葬品としては、自分の知る限りは、やはり一般には生活用具——死後の生活に備えた、そういうものの副葬だと思っんですね。年代的にもあるいは差があるかもしれませんが、少なくとも日本

の四世紀、五世紀に見られる呪性のある宝器的なものというものは、どうも朝鮮半島の古墳では見られないですね。

杉山 あまりないようでございますね。

斎藤 それと、先ほどお話し、自分は原始古代社会のそういう精神生活の問題では、貝製品ね、貝殻、それほもつと研究されていいんでないか、これは非常に重要な意味を持つと思うんです。

たとえば、先ほどの山梨の銚子塚にせよ、静岡県松林山古墳にせよ、突起のある水字貝ね、あれが棺の東北部分に一つ離れているんです。ところが水字貝というのは、南



水字貝の腕輪

『松林山古墳発掘調査報告』より

海産の貝なんです。この間も、奄美大島に行って、海岸に水字貝が落ちていたのでね、嬉しく思ったんですが、そのくらいなんです。そのほかいろんな貝。あれがなぜ日本の古墳に副葬品としてはるばる静岡県なり山梨県まで来たか。そしてその強い伝統というのが、また例の碧玉で作った石釧、鍬形石とか車輪石とか、それから銅の腕輪、それに突起のついているのがあるんですね。

杉山 そうでございますね。

斎藤 それも、いまの水字貝やなんかの貝の突起なんですね。だからあの貝というものの力強い神秘性というか、それが日本の古代人がいかにして用いたか。これはたしかに三島さんですか、書いてる論文もありますからね。(三島格『貝をめぐる考古学』学生社、昭和五十二年刊、等)

杉山 そうですね。

斎藤 これは民俗学的に研究されてもいい問題だし、考古学その他でも非常に重要だと思うんですね。

杉山 貝は、復活の時にも出てくるんですね。大穴牟遲神でしたか、蜺貝・蛤貝を使って、というのもありますけれども……。

斎藤 日本の場合には、大型の巻貝ですね。この種の巻貝と、それから……芋貝っていうんですか、二種ですね。

杉山 巻貝ではゴホウラと言っているのが一つですね。そ

れと大形の芋貝、これが非常に弥生時代には使われたよう
です。それからあとは傘貝系統のものですね。あれは南海の
ものをわざわざ、ムリしてでも手に入れてくるようすね。

斎藤 そうなんです。ですからそういう問題。

それから朝鮮半島では、統一新羅の新しい時にね、実は
善徳王という女の王様の造った、あるいは存在^{かんこうじ}が、芬草寺
の磚塔というのがありましてね。それに納めたものには芋
貝のようなものがたしかにあったと思うんです。ほとんど
それだけの例なんです。

それがどういう意味で納めたかなんですが……。ですが
ら、そういう意味では、日本で、特に海に囲まれた日本で、
南の方との関係の問題、いろいろ考えていい問題と思いま
すね。

杉山 そうですね。古墳時代まで、そうやってわざと作
り出してくるということに大へん問題があったと思うん
です。まあそういういくつかの問題、弥生時代から流れがき
て、繋がってくるものもあるし、何かプツンと切れるもの
もあるし、いろいろあるとは思いますが……。

ちよつと話がこれもとぶのかもしれませんが、銅鐸やな
にかはこれで切れてしまうんです。最近、小型の銅鐸が
ぼつぼつ出てくるようすけども、あれはやっぱ関係が
あるんでしょうか。

斎藤 ばくは同じようにね、普通の銅鐸と、いわゆる小
型の銅鐸を、もう少し区別しなくてははいけないんでないか
と、思っているんです。

それからもう一つの問題は、銅鐸が発見された場合、意
識的に隠したのかどうか、いろいろ問題です。そういう
意味では、弥生時代の末期あたり、われわれ計り知れない
くらいの何か大きな変化ということもばくは考えたいと思
うんです。

ただ銅鐸そのものは途絶えたとしても、——全く形式は
別ですが——鐸、鈴鐸、^{きなぐさ}佐奈岐（鐸）というようなもの、あ
れはやっぱ神社にずっと続いている。

杉山 鉄鐸は、日光の男体山からも出てますし、宗像の
沖ノ島からも出てます。実際の祭祀のほうで使ってるのは、
長野県の小野神社などがありますね。

斎藤 大場さんがいろいろ調べられてね。（大場磐雄の論
文に「小野神社の鉄鐸」『考古学雑誌』二三—四などがある。）

杉山 ああいう鳴る物——お祭りに使う鳴り物といいま
すか、そういうものも一つの伝統がずっと流れてくるもの
なんでございましょうね。

斎藤 そうですね。ただその鳴り物の場合も、さつきお
話したように、韓国の場合、これはむしろ民俗学的な研究
者が言ってるんですが、鳴り物はかなり神聖な物として、

いわゆる巫女などが使っているものがあるんですね。ですからそういうところには、鳴ることによって、大きな、神秘的な、眼に見えない力に頼るとか、関連するとか、いろんなことがあると思うんです。日本ではそれがずっと後世までサナギ——鉄鐸として発達していたということですね。

杉山 鳴り物では、別に、先生も登呂遺跡以来の御関係があると思うんですが、琴を私も書いてみまして、日本はどうもずーっと古くから——古くからという言い方は問題ですけど、弥生時代以来、「やまとこと」というのはどうも六絃のようだ、と。そして古墳時代にだけちよつと五絃の琴が入るけども、もともとの流れは六絃の琴で、ずーっと主流にある。その六絃の琴を見てもまずと葦津緒あしづおを付けて、琴の尾に梢頭はすがしらと言ってる突起を出すわけですね。その突起を付けていくやり方で、六絃の琴というのは日本のものしか見つからないような気がして、探して追いかけてみたんです。伽倻琴とか高句麗の臥篋篋とかみたんですけれども……。どうも六絃の琴というのは、中国大陸でも違うんじゃないか、と。中国の場合には、もと五絃であったのが七絃になった。七絃のいわゆる「琴」になったという言い方ですけど、しかし中国でも五絃の琴というのは非常に珍しい。神話に出てくるような琴で、この前曾侯乙墓という戦国時代墓から小さな五絃琴が出土しました。あれは非常に

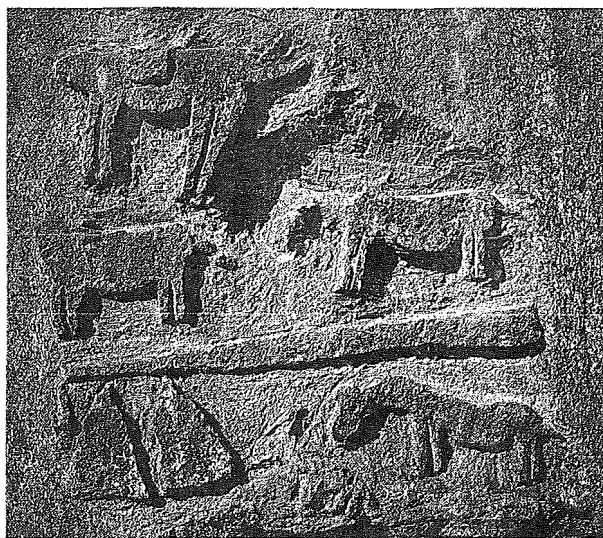
特殊だったようですね。

そういうことを見てみますと、日本の古墳時代に入ってきた五絃の琴も、よそから入ってきた文化のようです。それで六絃の琴の、後の正倉院の和琴につながるの、弥生時代からのつながりじゃないかと、この前書いてみまして……。それと、その時はちよつと最後には少し考古学から離れてしまったんですけども、琴の言葉——いわゆる言葉と琴の音というのは非常に関係してるんじゃないか。琴によって自然に出てくる言葉が、神様の言葉でもって、それがいわゆる「言葉」「コトの葉」と言われるんじゃないかということに触れましてね。それで八千矛の神の命の「ことのかたりごとこをば」という言葉を最後にくつつけるのは、やはり琴によって喋っているお祝いの言葉であり、結婚式の祝言葉やなんかになるんじゃないのかなということを書いてみたんです……。

まあそんな音というものと祭りというものは、銅鐸——サナギもありますし、琴のようなものもずつとつながりがあると思うんですね。

斎藤 ごもつともですね。

それから、たとえば、登呂からも出た弥生時代の木剣ね。ばくはあれはサナギのようなものを付けて使用した祭祀具ではないかと思ってるくらい。といいますのは、例の熊本



熊本県人吉の横穴浮彫

の人吉の横穴の壁画にね、こういうのがあるでしょう。棒状のものの先きに三角につけてる。これがサナギでないかというようなことですね。ですから、そういうことでは、先ほどのように音っていうもの、そして古代の神事、葬祭事、まあそういうものと非常に関連するものがあると思うんですね。

もがり

杉山 それでは次に日本の神話とか古典に出てきたものの中から、話を進めてみたいと思うんです。この間、御大喪の時に、御陵にお納めするまでに期間があるわけですが、あの期間の問題ですけども、古くから殯とか、あるいは喪屋を造るとか、そういうことが出てくるわけですね。ああいう伝統というものはいつ頃からあるものなんでしょうかね。また形なんですけども……。

斎藤 まず喪屋の問題ですね。一般の場合喪屋、皇室——天皇の場合は殯宮、あらきの宮なわけですね。これは例の「魏志倭人伝」に既に、亡くなった場合、七日七夜歌舞飲酒す、とありますよね。それは当然喪屋だと思っただけですがね。遺骸の前で埋葬の前に一つの儀式を行なったこと、それがはっきり本当に、日本の当時の風俗をそのまま書いている

と思うんです。ですから、少なくとも弥生時代には——三世紀の後半ぐらいには、あったことを考えていいと思うんです。ただ専門の考古学では、どう実証出来るかですが……。

古墳時代になると、もう当然喪屋、もがりの儀式というようなものはあった。そして例の『古事記』のアメノワカヒコの場合には、当然それはもがりの儀式ですがね。ですから、この場合、もがりの意義っていうのは、神話学、民俗学、いろんなことで研究されてますが、民俗学のほうでは、死者の確認というような問題も考えられているようですが、これが日本では長い伝統で現在に続いていると思うんですね。

杉山 この間、昭和天皇の場合にも、御須屋——お墓の上の建物ですが、民間でもわりあいと簡単に造ったものが、朽るまでですか、何日間か決まりがあるのかもしれないんですが、よく建っているのを見かけますけどやはりああいうようなものも、あんまり形として残ってこないのかもしれないですね。でも、古墳時代にもやはりあったものなんでしょうね。斎藤 これは考古学では、物的な証拠がないと思うんですけれどもね、いまのような御須屋のようなもの、それから喪屋、そういうものはないか、と。最近、喪屋の跡でな

いかというようなことが、いくつかは言われてますけれども、もし考古学的に、古墳時代の喪屋の跡を実証する場合には、ある掘立柱のなような柱が何本かあって、その前でお祭りしたような痕跡、たとえば供膳——供えたような馳走の土器や何かとか、あるいはいわゆる燔火^{ベンカ}——火を焚いている痕跡とか、何かそういうものが掘立柱の遺構の前に散乱しているような状態の場合、これは喪屋にかなり近いと思うんですがね。

杉山 いま先生の言われた、亡くなってからの喪屋とか、殯の宮のようなところに安置する、一時おまつりして、墓所の用意が出来た時に墓室にお納めする。納めると、墓前でのお祭りする建物もまたあるし、場合によってはお墓の上にも、簡単な建物といいますが、屋根でしょうかね、そういうものを置いている。

ちよつと気になるのは、古墳時代の日葉酢媛陵のところに、石室のちよつと上のほうに石の屋根状のものがあるという事ですけれども、お墓の上に置くものと、それからいまの殯期間中の殯の宮と、それから墓前のおまつりする場所と、一個所で全部やつちゃうんじゃないかと、何段階かにまつりというものがあつたんだろうと思うんです。その点どうでしょう。

斎藤 ですから、まず当然亡くなった時に最初に造られ

るのが喪屋であり、殯宮であり、そしてそこで何日か……。この何日かというのも、期間をはっきりしないんでないかと思ひますがね。まあとにかく複数の日数、ここに遺骸を安置して、そこで夜も昼もおまつりする、それは同じだと思うんですね。

実はこの間、十八日ですが、皇居の松の間で殯宮に祇候させていたんですが。その時も自分はやっぱり殯宮の構造というようなものを、四十分の間で拝見さしていたんですが、奈良時代あたり、『万葉集』に、やはり喪屋の帰りに白妙が垂れてるのが見えたというような歌がありますが、そういうような白い布帛というか、そういうものと同じ伝統でないかと思つたんです。

それともう一つは、墓の前の建物ですね。それも例の長野県松本の弘法山古墳で、これは前方後方墳ですが、後方部の上で土器の破片が、これは古い形式の土師器です、弥生土器とも思われるくらい、それが墳丘のかなり上のほうにそのまま散乱していた。ぼくはこれは棚か何かに土器で食物を、お供えて、それがこう落ちた状態だと思つてね。

ですから古墳の上に、よく土器が散乱しているとかつていうことだけの事実が報告されていますが、墓上の供膳などの儀式はもう古墳の時にもあったのだないかと思ひますね。

杉山 構造物は分からなくなっていますけれども、墳丘

の裾とか、前とか、いろんなところで土器が出ておりますですね。あれが墓前の祭りにやはり関係してくるものだろうと思ひますが、なかなか難しいですね、考古学のほうでは。

斎藤 ただもう一つは、たとえば墓前のまつりですね。

それは日本特有のものかという、必ずしもそうでなくて、たとえば新羅の古墳——ぼくが直接発掘した古墳の場合、やっぱり墳丘の上のほうに、新羅焼きの土器がかなりあるんです。墓前祭的なものは何も日本だけでなく、広く行なわれたやり方であると、感じたことがありますね。

もう一つは、案外そういう伝統が、現在の日本でも沖縄で残されてると思うんですね。葬送儀礼とか喪屋のようなものを——ぼくは、今度の本にちよつと入れましたが、そういうものもありますし、沖縄に日本固有の伝統が案外強く残されているんじゃないかと思ひますね。

杉山 先生の『東アジアの葬・墓制の研究』の中でも、喪屋のこともだいぶ、挿図を入れられて書かれていますし……。

斎藤 それから東北中国のほうでも、やはり古代の北方民俗で、同じような事が幔幕を張った建物の中で遺骸を安置するということ、『黒竜江速略』という本にね。ですから、もう古代アジアの同じようなやりかたなんですね、喪屋的な存在についての。

杉山 やはり一つには、もう一度生き返ってくれないかという願いを持つてゐる時期もあるのでしょうか、そういう儀礼もあるでしょう、それから、あんまりこれは精神的でないかもしれませんが、お墓を準備する期間もありましようし、いろんな意味があるんでしようね。

斎藤 それもあつたと思うんですね。最も精神的な深さは、もう一回の蘇生を祈念するというか。それと共に、お墓を造るという……。ただ、いまのお墓を造るのに逆戻りするかもしれませんが、日本の前方後円墳にせよ、中国もですが、当時案外、もう既に生前に造られていたと思うんですね。ですから亡くなられた場合は、若干それを化粧して、そして納めるというようなこと、それが普通であつた。いわば「寿墓」あるいは「寿陵」という、それが案外普通でなかつたかと思うんですね。

杉山 いや、それはたしかに、ぎりぎりになつてからあんな大きなものを造つていたんじゃないや間に合いませんし、そういうことでは早くから準備されていたんでしようね。

喪屋のこともそうですが、イザナギ・イザナミノミコトの話に、黄泉戸^{よみつへ}喫したから帰れないとか、まああの時は待つてくれということですが、死者との会食というんでしょいか、食事の問題、食べ物の問題ですね。亡くなつてからしばらくの間は、ほとんどいつもと同じようなお膳を用意

するとか、民間でもいろんなやり方があるようですけども、ああいう問題もやはり古くから出てくるものなのでございましようね。

斎藤 それで、いまの黄泉戸喫ね。実はもつと民俗学の知識をと思つて、柳田国男先生のいろいろ書かれたものがありますよね。『葬送習俗語彙』の中に、いろんな全国の方言的なものがありますが、たしかに死者の儀礼の場合のご飯その他、別な竈にいまでもしてるとか。そういう点では、厳然と区別されてるし、もう一つは、アメノワカヒコの中にある春女^{つぎめ}、ああいうようなものも、当時のお葬式に伴う一つの役割だと思ふんですね。

それから、ぼくがもう一つ思つてゐるのは、皆さん「供膳土器」と書いてるんですね。ぼくは、土器そのものも供えたことがあるかもしれませんが、むしろ土器は容器であつて、水や、米とか、それを供えて、そしてその土器が遺つてゐるのですね、ですからご馳走を供えている。それがとかく考古学者は、土器そのもの、これをそのまま供えたような……、だいたい中に入つてたものを供えたんだと思ふんですね。

杉山 たしかにそうですね。そういう意味では、この間の御大喪でも、もう少しみんなに食べ物を出すとか、そういう雰囲気があつてもよかつたなという気も一方では思ふ

んですが、あれだけ大ぜいじゃムリかもしれませんか……。

斎藤 そのへんムリですがね。これは余談になりますが、
殯宮の祇候の時には、お菓子を最後にいただいたのですが
ね、白い落雁のようなご紋章入りのね。御大葬の日のあれ
だけの大ぜいには無理でしょうけど……。

杉山 やはり食べ物というものは、人間にとって大事だ
ということもあるし、もう一度生き返ってほしいという時
の喪屋の儀式の時には、これはどうしても必要なものだっ
たんでございましょうし、また、いま先生言われましたよ
うに、土器類が出てくる、墳丘の裾やなんか出てくる。
あるいは石室の中でも出てくるものがあるわけですけども、
あれもそういうお供え物をたくさん盛ったのが並べてあつ
た……。

斎藤 それなんですな。これは日本だけじゃなく、新羅
の古墳でも、発掘した新羅焼き土器——高杯にたまたま魚
の骨が入っていましたね。これは調べてもらったらスズキ
の骨だった。ですからやっぱり魚でも何でも納めていたと
いうことですね。そしてそれは案外東アジア全体の同じよ
うな考えでないですかね。

杉山 日本のは、貝殻ですと少し残ってるのがあります
ね。

斎藤 ありますな。

杉山 なかなか遺りが悪いもんですから……。

斎藤 それから、案外例は少ないけど、清野謙次さんの
土製模造菓子——お菓子でないかという、それが入ってた
例を紹介してますがね。ですから、案外そういうようなの
を供えている。

杉山 私、実はインドネシアのバリ島でお葬式見てたん
ですけども……。

斎藤 あ、そうですか。

杉山 海岸で、最後火葬して、それで波打ち際に臨時の
棚を作りまして、その時に、いろんな神様を呼んでくるわ
けですね。死者に対してお供え物だけではなくて、いろい
ろと行事をするという大変ですけども、その葬式そのもの
を守る神様とか、こんど行く先の神様ですか、あるいは先
祖の神様か、そのへんが私にはあんまりよく分かんなかっ
たんですけども、いくつか棚を分けまして、それにみんな
あげ物をあげてるんですね。あれを見ますと、死者に対
するあげ物だけじゃないんですね。

しかも一番印象的だったのは、土器の使い方なんですけ
ど、その土器は非常に僅かなんです。僅かなのは何かって
いうと、水ものですね。あそこはお酒じゃなくて、何か汁
——汁っていても酒に類するような汁でしたけども、そ
ういう水ものと、あとは火をあげる、油を使うものだけに

は素焼きの土器を使ってるんです。あとはみんなヤシかなんかの葉を使ってるようです。ああいうもので編んだり組んだりした、そういうのがみんな器になってまして、土で焼いたものなんているのはごく僅かなんですね。それでもすごい量なんです。もう積めないもんですから、次から次へと上へ積んじやって、まあ棚の大きさにもよるんでしょうけども、何段にも積み上げて、それでその一部分に油で火をあげるものと、水ものをあげるものだけが素焼き。

ああいうのを見ますと、古墳やなんかでも、日本でもいわゆるカシワやなんかで使ったものがあるわけですから、土器の分だけでない、植物製など相当いろんなものがあったんじゃないかなという気もするんです……。

斎藤 ごもつともですね。考古学者は、遺ってる土器だけで総てを考えますが、いまのような葉を利用したとか、いわば折敷っていいですか、そういうようなものもかなりあったことを考えていいんでないですかね。そうすると遺された土器は、あるいはいまのお話のように、特殊な何か納めたようなものかもしれないし、いろんなことが出てきますね。

杉山 その時にも感じたんですけど、それは昼間から夕方にかけて、みんな海岸でもって——朝から本当は葬儀はやってるんですけども、夕方暗くなるまで昼間からずーっ

と土器の火を、次々と油を足すっていいですか、長い間海岸であげてるんです。やはり火というのは日本でも相当大事にしてるんじゃないでしょうか。

斎藤 この葬式と火という問題ね。あるいは火の場合には、一種のそれこそ庭火的なもの、それから松明とかね、いろんなものがあると思うんです。それから亡くなった場合、死者の枕許で火を点す、そういう儀式とか。ですから、葬制において欠くことの出来ない大きな二つの要素は、火、それと水、それだと思っんですね。ですから火の場合、こんどの陵所の儀でも、四個所で庭火が点火されたんですね。夜。本当に莊嚴というか、本当に古代に帰るようなね。

ところがその時に考えてみたんですが、庭火というようなものは、いわば燔火であって、縄文時代でも、よく遺骸を葬った傍に火を焼いた痕跡があるわけなんです。ですからそういう点では、もう縄文時代からの流れがずっとあって、やがては松明も同じだと思っんです。それから枕灯ね。これは仏教が入ってきて、枕灯というのはあるわけなんです。だからそういう固有なものが、その後いろんな形の儀礼になって現われているが、現在もそういう庭火その他で使われているというようなこと。それは言っっていないではないですかね。

杉山 民間でも、ローソクの火を消さないように一生懸

命やってますね。先生のこのご本にも、「葬儀における火の使用」ということで……。

火の使用というのは、祭りそのものが比較的夜、暗闇の中で行なわれていくことが多いのかもしれませんが、いまの葬儀は昼間でもずっと明かりをつけてますね。夜の行事っていうものは、やはりこういう行事としては大事な……。

斎藤 当然。葬儀というのは古代は夜なんですよね。火葬も、たとえば『万葉集』なんかでは、朝になって火葬の骨を拾ったとかありませんから、総て夜なんですよね。大正天皇の時も、陵所の儀は午前二時から三時の夜中なんですね。いままでずっと夜なんですがね。ですからそういう場合、火というものの大きな力というものはあると思うんです。

実は、これも余談だけど、感想の（朝日新聞二月廿七日夕刊に載せられた）文中で庭火が赤々と燃えてね、そして火の粉がちようと天皇の御霊を守るように空に飛び散ったというようなことを、その場で思い出して、ちよつと触れてみたんですがね。実際そういうような実感が湧いてきますね。火の粉が上に上がるのが、ちよつどそういう呪力をもつて行なうというような……。

ですから火というものは、赤という色と同じように、そして火はもつと強く守るという意味もあったのではないか。

そして一切の悪魔を寄せつけけないという、そういう伝統がいまでも残っているのではないかと思いますかね。

祓と禊ぎ

杉山 大事なもののなんですね。

これは葬儀だけでなく、祭りのほうでもやはり火は大切なもので、ゾロアスターとか、拝火教とか、あつちのものを引いてくる以前から、やはりもともとあるものなんではないでしょうか。

それともう一つは、いまの葬列における松明持ちですね。あの松明も大事なものだということなんですけども、アメノワカヒコの時にも出てくるんですが、持帚者（はきもち掃持）。あの持帚者の問題も、私は祓いの問題と結びつけて、かなり古くから、民俗儀礼化していたものとして面白いし、まあこれは葬儀だけの問題じゃないのかもしれませんが、葬儀における祓いの問題、これは大事な問題じゃないのかなという気がしてゐるんですが……。

斎藤 ごもつともで、これはたしか平安時代に、あるいは鎌倉時代初期に、当時の葬礼を書いている『吉事次第』

の場合にも箒を持つ者というのが現われているんですね。そしてその箒は、死者が出た後で焼いたとかそういう問題

斎藤 やっぱり被いの場合、箒、それといまおっしやったような禊ぎね、これはもう日本の伝統的なものであつて、たしかイザナギノミコトの神話の中にも見えている。あれはおそらく、ごらんになったバリ島でも、最後には海で身体洗ったんでないかと思いますがね。

杉山 そうですね。

斎藤 そしてこれは流れる水なんですね。止まってる水でないんです。流水で洗うことが一つのポイントなのですよ、ですから、そういうことはもう古代から見られる。そしてそれも『吉事次第』ですか、あれにも載ってるんですね。仏式の場合にも、それが行なわれているわけなんですね。

杉山 もっとも「魏志倭人伝」のも、「練沐の如し」という解説がありますから、かつては中国大陸でもそういう水を浴びて浄めるものがあつたんでしようし、インドでも、ガンジス川の水を浴びてるのがありますけど、あれもほんとに精神的な面といえますか……。どうも私なんかは、あれに入ったら病氣になっちゃいそうだなと思う、そういう水でも、彼らはちゃんと正装した格好で入って行って、水を浴びてます。あれを見えますと、非常に広い東アジアの範囲の中でも、そういうようなことがかつては行なわれていて、いま先生が言われたバリ島の場合でも、たしかに潮

の満ちてくるのを待つてるんですね。

斎藤 なるほどね。

杉山 それで、あれは時間を調べてるんだと思うんですけども、引き潮の時に、波打ち際でそういう葬儀が行なわれて、みんな坐ったまま待つてるんです。初めは何もしないでいるから、何してるのか分からなかったんですけど、潮の上げてくるのを待つてるんですね。結局潮が上げてきますと、全部それを持つて行っちゃうんです。それを、人もみんなそこで待つてる。翌朝いってみたら棚もなにも流されてなにもなくなっていました。箒やなんかで払うほうと、それからもう一つは水をかぶって、先生が言われたように流れる水じやなきやいかん。動く水じやなきやいかんということ、海の水もやっぱりそういう意味では動く水なんですよ。

斎藤 それから海の水、塩という問題が出てくるのですね。お相撲さんの塩の場合、これも別のいろんな考え方があるでしょうが、その起源という問題ね。これも結局そういう海の水——海水からが元なんですね。そういうような例も、いろんなことに現われてると思うんですよ、浄めるといふことは。

杉山 やはり塩は、海の水の代わりといえますか、そういう意味を持つてるんですね。

斎藤 だと思ふんですがね。料亭の場合でも、あの塩は化学製品の塩ではないわけですね。そういうようなのが、やっぱりどっかに伝統というようなもの、浄めるというのが……。

杉山 前に、若狭で宮座の調査をした時に、そこでは海の水を一升びんに入れて持つてくるんですね。

斎藤 あ、なるほど。

杉山 それで海の水を持つてきまして、海に行かれなかった人たちは、そこで浄めてるんです。遠いところだったですから、代表が行つて海の水を持つてくるんですね。それと同時に小砂利をたくさん拾つてきまして、その砂利を撒いてましたけども、それも塩水であり、砂利であり、まあ塩ではないんですけども、一般的には塩が浄めになるわけで……。いま先生のお話の中でも、仏教的な葬式をしてても、後でやはり結構古くから浄めてるんですね。

斎藤 そうなんですな。

杉山 いや、実はその祓いの問題というのは、どうも江戸時代のものを見てましても、特に神道のほうは祓いの問題を非常にきつくといいですか、近世の儒葬と神道葬というのを較べてみますと、神道葬に一番特徴的に出てくるのは、最後の終つてからの祓え。葬儀そのものに対しては祓えを行ないますが、後での祓えというものを非常に氣

にしているといいますが、大事にしているような気がします。儒葬などの場合には、どうもこれは、中国の合理主義的な面があるのかもしれないけども、日本の祭りのほうが氣にしているんじゃないかなと。民俗的な雰囲気から強が出てきちゃうのかなという氣がしているんですが……。

これは、お葬式のまつりだけじゃなくて、神祭りでも、きれいになるといいますか、精神的にも肉体的にも、誰か大事な人を迎える時には、きれいに風呂にも入つてこようし、床屋へも行つてこようしという雰囲気もあるでしょうし、氣分的にもきれいにして、また洗濯してきれいになったものを着ようし、時には少し、みんなにも見せるのにきちんとしたものを着ようじゃないかというようなこともあるわけで、それが祭りの中でもやはり出てきているでしょう。

葬儀の時は、装束というものは、黒いものとか、白いものとか、黄色は少し使われますけども、色はあんまり鮮やかなものは出てこないようですね。これは考古学のほうではなかなか難しい問題なんですけど、ただ埴輪やなんかも多少ありますし、色と葬儀、そういうようなものは、何か先生ありませんでしょうか。

葬と色

斎藤

まあこんどの場合には、鈍色^{にじ}という言葉ね。薄鼠色の鈍色、これは『令義解』なんかにも鈍色という名前が出ているように古いんですが、いわば派手、華麗さというようなよりは、黒、あるいは白というものが、古い時から伝わっているんじゃないかと思うんですがね。

これは中国あたりでも、そういうものは、同じような考えではないかと思えますよ。ですから葬式と黒というものは、どこでも見られる。

それから黄色とか白、これはたしか鳥居先生が書いてる、モンゴル地方に古い旗があったということを、『人類学上より見たわが上代の文化』にも。そういう黄が、いったい日本固有か、あるいは中国の影響かというようなことね。

ただ、いま思い出したんだけど、『万葉集』に、「怕^{おそ}しき物」という挽歌の中で、流れを黄染めの船が通るといっているがあるんですね。あれは「怕^{おそ}しき物」と書いてる以上は、遺骸を船に乗せて、そして黄染めの屋形っていうか、それを表現してるとしか考えられないと思うんです。その前は青魂が何とかと魂のことだね。そうすると遺骸を船に入れて、その屋形を黄に染めた。ですから黄っていうものは、

もうそういう時代から現われているんですね。と思いますよ。

杉山 そうですね、あそこに出てくるのは黄染めですね。黄色とか青とかというのが、そういうところで出てくるんですね。

斎藤 それと、たしかこれも、『常陸風土記』ですか、青旗。それから『万葉集』にもたしか青旗が出てます。ですから、そういう青、黄、黒、それが日本の伝統の色か、あるいはやっぱり中国あたりでも、古代のもので、日本の七、八世紀ぐらいには、かなり中国の隋、唐の葬儀が入ってきてますからね、だからそういうような関係か。それをどう見るかですね。

色の場合は、考古学の場合、まあ壁画の色彩ぐらいしか考えられないと思うんですが……。

杉山 千葉県の芝山の埴輪博物館で、埴輪祭りというのをやってますが、その時に一生懸命で埴輪の色から、装束といいますが、衣類の復元をしたんですね。だけど私それを見まして、感想としては、もしお祝いの事にやるんならば、もっといろんな色を使ってもいいんじゃないか。というの、少し寂しいですね、色が。ですから、これは忠実に復元しすぎたんじゃないかって……。お祝いの祭りやるんなら、もう少しいろんな色を使ったらどうだって私言っ

たんですけどね。やはり少し寂しい色になることは確かでしょうですね。

斎藤 あとまあ赤の場合、埴輪には赤がかなりね。赤の塗彩^{とさい}というようなことを、いろいろ研究者が問題にしていますがね。赤そのものは一つの魔除け的なものかもしれないですね。

それと、いまの色の問題では、もう一つ、これも専門の方にお伺いしなくちゃいけないけど、中国の陰陽五行の考えの色っていうようなもの、そういう問題もいろいろ出てくると思いますね。

杉山 かなり早くから、大陸の文化というものも、何度にもわたって入ってくるでしょうし、いろんな影響の仕方して、それから取り入れているものもずいぶんあるでしょうし、五色幡、これなどは早くから日本に入ってきて、そしてそれが日本文化となつてしまっている。だから、非常にはっきりと入ってきているというのが分かるものもありますし、そうでなくて、もっと広いアジア的な文化なんだというものもあるわけですね。

斎藤 ごもっともですね。その点、本当に日本固有のもの、広く東アジアの古代民俗に共通しているものと、それから新しく大陸から入ってきたもの、その三つが混入されている。それをいかに識別するかということがいろいろ問

題だと思っんですよ。

杉山 仏教が入ってきました、インドから中国大陆である程度中国化されて、そしてその中国からこんどは朝鮮半島經由か、まあ直接くるものもあるでしょうけども、日本へ入ってくる。しかしその仏教そのものが持っているインドのアジア的なもの、あるいは中国で変換された、大陸での変化を受けたまたアジア的なもの。そしてまた日本へ来て、日本的なものと、いろいろ変化しながら来ているものもあるでしょうし、そういう意味では、一概に影響受けてると言いながらも、元からやはりそれに共通するものがあつたんだというようなことも出てくるわけですね。

固有の葬制

斎藤 それで、ばくも、もっと取っ組みたいと思うのは、日本の固有の葬制、墓制——特に葬制ですが、これが仏教文化、仏教の影響で仏式になって、いったいどのように変貌したかという問題ね。これはこれからもっと勉強しなくちゃいけないんですが、そういうような中で、二つの例がある。

一つは遺骸の枕。それが北枕、これね。仏教では、平安

時代から、いわば北首西顔というのが、それは仏教によつてということが考えられてるんですが、ぼくはこの北枕というのは決してそうでなくて、もう縄文時代から、日本人では北に枕するのが——これは実際古墳時代やなんかで統計としてみたことがあるんですが、一番多いのは北枕なんです。それから東北とか、北西とか、それから東がまたそれに次ぐんですがね。ですから、そういう意味では、北枕というのはもう日本固有のやり方です。これが東アジア全体に通ずる問題かどうかは別としてもね。

ところが、平安時代ですか、面白い文献があるんです。

これはね、貴族やなにか亡くなった時に、まず近習の者が部屋に入つて、近習の手で遺骸をずーっと回して北にする。その回し方も細かく書いてるんですね。まず北にするんです。そしてこんどは近習がみなその部屋から出るんです。次にお坊さんが入つて来て、この遺骸の顔を西に向けるわけなんです。この関係が、なぜ近習の手で北枕だけにして、退散して、坊さんだけで西に……。そのへんが、西のほうにいわば西方浄土に向くのが仏教の関係で、北つていうものは在来の伝統が案外強く残されていたんでないかということね。

それからもう一つは、仏教で六道銭というような。江戸時代、ご存知のように経済関係が破綻するので、六道銭を

やめろという幕府のおふれも出ていたわけなんです。六道銭というのはいつから言われて発達したか。最近、例の磐田の一の谷ね、あの中世のお墓でも、お金が六枚ぐらい出ているのがあるんです。それが果たして六道銭で言っているのかどうか簡単に言えない。むしろ奈良時代から、墳墓に和同開珎やなんか副葬されてるんです。平安時代の墓でも。そういう日本で貨幣が伝わった時点から、カネを副葬するという風習があつて、それが仏教が入つたある時点から、六道銭とうまく結びつけられている。だからそういう意味では、日本の長い伝統が仏教の中にもはいつて、あるいは北首西顔とか、あるいは六道銭のような。このようなことはいつぱいあると思うんですよ。

仏教で、川を渡るとかなにかね、橋で、そういうものだって、日本でも古くから考えていいし。もっと追求してみたいと思つてるんです。

杉山 先生、この二本にも、北首西顔ですか、このことを資料を引かれて触れられておりますけれども、たしかに近習がやるということは大へん大事なことかと思ふんですね。近習がとにかく枕を北にすることをやって、それが一つの行事的になつてゐるわけですね。そういう意味では、古墳の統計もたしかに北は多いんですね。

斎藤 多いんですよ。ではなぜ北かというね、まあ

北っていうのは暗い方向ですかね。それから沖繩では——それも考えなくちゃいけない——海のほうに向くっていうのもあるんですね。ですから一概に方角だけでもなくて、その環境によってもいるし、いろんな……。これは世界各地で、最初に話したように、吐魯蕃のほうは、メッカのほうを向くというね。そういう中国の中でも、やはりそういう宗教の人は、頭をメッカのほうに向けさせる。だからいろんなやり方があったと思うんですね。

杉山 南半球の例なんかはないんですね。

斎藤 南半球はどうですかねえ。これも墓の材料はありますかね。

杉山 これは面白いかもしれませんね。

ただ、お墓の入口っていうのは、先生、わりあいと南向きがが多いですね。

斎藤 南なんですね。

杉山 だいたいお墓の入口は南に向けてはいるけども、遺体は北に向けてる。先生も千葉県の横穴墓を調査されておいでですが、私もいくつか見まして、横穴墓の向きが、私のほうの東京湾の側の千葉県では西向いてる時があるんです。南向いてるのも多いんですけども、西向いてるのは、これは開けた方、海の方を向いてる感じがありますですね。斎藤 ですから、そういう方角、それから太陽とかなにか

ね。玄室でも、南に入口があった場合は、棺を南北にして、あくまでも枕は北ですよ。

杉山 枕を北に持っていくんですね。

斎藤 それから、もし棺が東西に横たわってる場合は、東のほうが多いですね。

杉山 そうでございましてね。これはそういう意味では、仏教以前からの雰囲気です……。

しかしもう一つのお金の問題も面白いですね。

斎藤 まあ六道銭という名前ね。辞典にはただ六道銭。その六道銭と言われた起源がね、いつからどう——。だから一の谷でも六枚あったからすぐ六道銭と言うなって言っただけですね。

杉山 まあ和同開珎やなにかの納められた奈良時代のあいいう火葬墓もあるわけですけど、それは網干先生が、必ずしも火葬墓の最初のうちのは、仏教の影響というけども、仏教の影響じゃない可能性のものもある。あの当時の上層貴族の流行的な墳墓形態の可能性もあるようなことを言われていたと思うのです。たしかに火葬も、日本ではだいたいい仏教の影響だという意見がすごく強いんですけども、必ずしもそうばかりでもない可能性もあるようですね。

斎藤 これはいわば仏教の影響というのは、文武天皇の四年ですか、ちょうど紀元七〇〇年になるんですね。道昭

がわが国の火葬これより始まるなりって、もうちゃんと書いてるんですがね。ですから、そういうことで、火葬の始源という道昭とお思いになるんですけど、考古学では、いわゆる葬^{かまど}窯がその前からあったこと。ただ大きい流れというか、火葬の根本的な流れは、やっぱり仏教で急激に発達したことは言えると思うんですよ。だからその前にあっても、これは日本の全部でなくて、ただ、いまのような八世紀の頃から、持統天皇もされた、そういうことの大きな流れ。ですから火葬の影響には、仏教というものが大きく動いてたと思うんですがね。

杉山 中国でも、古くはあまり火葬というのはなかったようでごいますね。

斎藤 ええ。それも、とにかく中国は儒教ですからね。もう儒教は火に焼くのはけしからんという、大変なことなんでね。ですから火葬が行なわれてるのはお坊さんなんです。これはごくも文献をいろいろ調べてみましたかね。やがて中国でも一部には採用されて、少数民族も火葬をやってますがね、本来お坊さんだけだったんですね。ですから、こんどは日本に儒教というものが、特に江戸時代から、日本の葬制をある程度動かしていたことも確かで、その場合は儒教の精神では土葬なわけなんです。ですから、江戸時代の葬制、墓制は、またいろいろ今後の研究にもなると思

うんですよ。

墓前祭から祖霊祭へ

杉山 儒教のお墓はあまりみられませんね、いまでは水戸家のものが残っているぐらいで……。

そのお墓へ納めた後のおまつり。先ほどちょっと出てきましたお墓の前でおまつりしていく、これは葬儀の後でのおまつりだと思うんですけども、かなり時間が経ってからのもつりはどうでしょうか。前に、静岡県でしたか愛知県でしたか、横穴墓の蓋してしまった外の墓道のところでお祭りした須恵器が、中に納められてるものとは、時間が経過してるというようなことが出てきましたけども、時間が経過してからの墓前の祭りというようなことですね、これはどうでしょうか。

斎藤 これはやはり、亡くなってお墓に葬った後ね、それがいつまで続いたか、それが何年とかっていうのは別としても、いわゆる墓前祭っていうようなものは、かなり残されていたと思うんですよ。ですから、むしろそういう意味では、たとえば考古学の上で、ここに古墳があり、さらに奥の方に横穴がある場合、その前後関係ですね。やっぱり横穴の墓として知られて、ずーっと墓前祭が続けられた

以上は、その前に邪魔してお墓なんか築くことはない。いわば参道——参詣路というようなものもちゃんとあるしね。ですからそれがやがて関係の思想が途絶えたある時期になくなって、それが廃滅して、それからもうめちやめच्याにね。横穴にせよ、たくさん同じところに営まれる。古墳群もそうですね、円墳群だって。これはある時期まではお参りしている。このことを考えていいと思うんですよ。

杉山 墓道の問題も、論文がありますけども、お墓へ行く道、群集墳でもちゃんと道があって、お参りに行かれるようになってたというものもありますね。

斎藤 はい。殊にこれは儒教が盛んになったらなお。

杉山 実際に埋めたお墓よりも、むしろ祖先霊になっていつてしまつて、ほかでお祭りして、お墓のほうはどうも忘れられていっちゃうのかなという……。両墓制というのは、民俗学でいろいろ調査されてますけど、参り墓と埋め墓とは違うということもあり、これはまあ魂の問題になるのかもしれないが、あの埋め墓的な、お墓そのものはそれまでになつていつてしまうような雰囲気というのは、あれはどうなんでしょうか。日本的なものなんでしょうか。もっと広い範囲であるんでしょうか。

斎藤 どうですかねえ……そのへん外国のほうは、少なくとも儒教が発達してる朝鮮半島あたりの場合には、やつ

ぱりきちつとしたお墓、それにずーつとお参りするという、これは続いていますよね。ですから参り墓の区別というようなものが、果たしてほかでみられるのかどうか。これは日本めかも知れませんが。

杉山 民間でも、私どものほうでは、これは仏教的なのかもしれないませんが、三十三回忌が過ぎると、もうそれでの一個人に対する供養は終りで、あとは先祖の中に入っちゃうんだというような言い方。まあそれは子孫が、その人を知ってる人がそんなにあとまでいるわけじゃないという言い方もあるのかもしれないけれども、先祖の中へ仲間入りしてしまつてまつられる形と、個人の祭りとの違いが——違いがあるという変ですけども、また違う場所で祭つていくんだ、それでいいんだというような雰囲気もどうもあるような気がするんですけども……。

斎藤 まあ何ていうか、悪く言うとな身勝手なというか、便宜主義というかね。だからそのへんがだんだん合理化されたつていうか、あるかもしれないが……。

杉山 まあお墓での祭りをずーつと続けている雰囲気というのは、全国の神社と古墳との関係、なかなかこれ難しい面を持つてまして、後になつてから、どうもここが先祖の墓地であるということで、かなり後になつてから神社をそこへ建てて、先祖をお祭りしたものもあるようですけど、

かなり早くからお祭りしているものも、菅田八幡のようにあるようです。いま私が言ったのは、祖先と先祖をみんな一緒に話しましたけども——自分の家の一番の先祖だという場合と、それと代々の祖先であるという場合と、少し違いがあるのになって氣もしますし、まあそのへんがなかなか難しい……。

この前、私、これは少しわざと書いてみたのは、奈良県四条古墳というのが橿原で出まして、木器がたくさん出ましたですね。それで木製の葬具ということで出しましたけども、あの時に私見ていると、あの手のものは古墳としては整っていない、と。方形のもので、ちよつと張り出しがあるんですけど、どうもあの時期の古墳としては整い方が少ない、と。

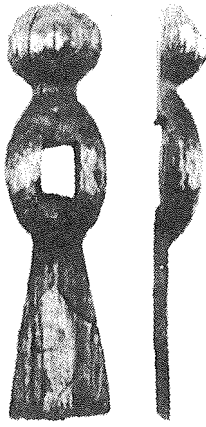
それからもう一つは、立地が他の古墳から離れたところにある場合が多い。そして古墳の立地としては、それほどいい状態のところではない。比較的低湿地が多いというようなこと。また、これまでにはつきりした遺体安置——安置された遺体を発見した例がない。これは上の墳丘がなくなつて——耕作あるいは開墾によつてなくなつたんだというふうに考えればそれは当然かもしれません。しかしもうちよつと考えてみると、墳墓の祭りに近い形で行なつた当時の祭りがあつたのか。これは場合によつては、この

四条古墳とか石見遺跡とか、そのほか何個所か天理市にもあるわけですし、場合によると近江の湖のところから琴や何かが出てきている遺跡がいくつかあるわけですけども、これなども含めて、どうも低湿地で行なつてゐる。みんなの生活の場の近くで行なつてゐる祭りがあつて、そしてそれが当時における古墳墓の祭りと似た祭りが行なわれた。それはどうも先祖の祭りをやらないだろうか、と。しかし普通祖先祭というのは、もつと後になつてから出てくるというふうには、いま一般的に言われていると思うんですけども、そのへんを私は思い切つて、五世紀、これはいい時代じゃないか、と。まあ雄略朝頃だとするならば、允恭天皇が甘樫の丘でもつて盟神探湯をやつて氏姓を正したという、ほぼその時期にも近いし、それから埼玉県の稲荷山鉄剣、あれも雄略朝だと言われているけれども、そうだとすると一生懸命自分の系譜を主張している。あれは、おれはこういう家の流れなんだから、こういう職業につくのは当然でもあるし、またおれの先祖はこんなだと言つて、一生懸命で系譜を主張してるんじゃないか。そういう時期が五世紀のあの時期にあつてもいいんじゃないか。そうすると、おれの先祖は、というふうな、また氏族集団が結束しなければならぬような雰囲気があつて、そこで祭りをやつた時に、比較のお墓の祭りに近いような祭りが行なわれて、その結

果あんな形のもが出てるんじゃないかっていうことを、ちよつと書いたことがあったんですけどね。これは少し極端かもしれないけども……。

まあ祖先祭は、いまでは六世紀頃からかっていうふうに言われていますが、このへんどうなんでしょうか。

斎藤 これはなかなかいいお考えだと思いますがね。まづぼくは、例の木製葬具ね、木製葬具というのは非常に結構だけれども、考古学者は木製の埴輪という言葉を使う、あれはいけないと思う。埴輪はあくまでも土製なんですね。あれを木製の埴輪と平気で言ってるんだけどね。あれは



石見遺跡の
鳥形木製品

『日本の古代遺跡奈良中部』より

木製の葬具でいいし、それと木製の埴輪ということをやったように、祖先の霊を祭るようなそういう儀式が、しかも低地で行なわれたという問題。これはひとつ新しい研究として、もつとみんな広く考えていいんじゃないですかね、これは。

杉山 まあもちろん木製のあいうものを使って、古墳墓でも、葬儀のほうでも使われていると思いますけれども、しかし中にはそういうものもあってもいいんじゃないかと。

斎藤 そしてあすこの場合、たまたま残されていたんですね、もつとあるいはあったかもしれないね。あの木製葬具には、鳥居の形があったんですか、ないんですか。

杉山そこはつきりしません……。

斎藤 ぼくは古代葬制、固有葬制では、鳥つていうことね。

杉山 あ、鳥形はあります。大きな一メートルぐらいある鳥があります。

斎藤 これは折口先生ですか、鳥というものは死者の靈魂の保持者であり運搬人であると言ってるけど、古代でやっぱ葬制に鳥というようなものがどういう役割をして、その鳥がどういう伝統で残されてるか。たしか民俗学的に

も、九州のほうでもお須屋なんか鳥を飾ったつていう、そういうのがありますし、そのへんもいろいろ問題になる、と思うんですがね。

杉山 鳥形の、これは朝鮮半島にもいろいろあるようですけれども、弥生時代にたくさん出てきますし、古墳時代でも、そういうわけでかなりわざと大型なものが出てきますね。あれが人形じゃないかなんて昔は言われてましたけど、最近ではもう鳥の形であるということが言われるようになって、それで石見遺跡とか四条遺跡で、鳥形の大型のものが出てる。あれは、そんなものも含めて面白いんじゃないかなというふうに……。

斎藤 そうですね。それから鳥でね、これも二、三年前、中国の昆明に行った時、あそこいろんな少数民族関係のものがあつたけども、やはり木製の鳥、それがどうも棺の前に飾られてるのがあつてね、写真撮ったりなんかしたんですがね。やっぱりこういうのは、広い古代アジアの葬制の中で、それぞれ見られていて、日本ではそれがかなり強く残されているというようなことですね。

杉山 天鳥船の話もありますけども、先生の調べられた九州の装飾古墳の中にも、鳥がみんな船の舳先にいますね。

斎藤 はい。

杉山 いや、実はこの前、これはさらにずーっと下つて

の話ですけども、平城宮の人形がたくさん出てますね、そこから小さな船の木製品と、やはり鳥形がちよつと出てるんですね。それで、あそこにいる金子さんが言うには、あいう人形を運ぶのも、やはり船と鳥が必要なんじゃないかと言ってるんです。これはすぐにそう言えるかどうか難しいとは思いますが、しかしこの鳥が関係してくるということは、もう一つは葬儀の時に、アメノワカヒコの時にも出てくるわけですし、あるいはヤマトタケルの白鳥伝承にも出てきますし、こういうものが古くからの日本の伝統の典型的なものなのかもしれないですね。

だいぶ時間もたちましたが、祖霊とか、その死後観とか、そういうものも本当は少しは触れていきたいとは思つたんですが……。

やはり私が一番考えるのは、なにか自然に帰るような雰囲気ですね。死んで、そのまゝ土に帰っていくほうも承知しているし、そして魂といいますが、霊魂といいますが、それは別に子孫が祭っていくんだという、それは別な場所です。祭つていってるといふような雰囲気は分かれていくし、なにかそのへんの問題も、東アジアっていいですか、ほかのところと較べて、そういう面で違いもあるんじゃないか。それとももっと広い意味で、人間としての自然な形なんでしょう。

斎藤

そうですね……まあ東アジアの中の共通した様相

それと、一番海を離れて東海の孤島というか、そこにあることの民族性というか、そういうものが案外強く現われているんでないですかね。これは朝鮮半島、大陸続きとやはり違う面もあってそこにいろんな固有的な色彩も強く出ているのですね。そういう意味では、葬制、墓制というのが、非常によく日本人の精神文化を表わしていると思うし、それがなお強い伝統でもって、どんな形でも遺されているというようなこと、そのへんもあると思うんですがね。

司会

どうも先生、長い時間ありがとうございました。

日本文化の源流——源流などと言うと、多少語弊があるんですが、日本文化というものの性格を明らかにするために、近隣アジア諸国、あるいはもともと拵げて、大きな地域との関係を踏まえながら、日本人の独特な精神世界がどんなふうなものだと考えられたかという、それを一番実証主義的な考古学、しかもその源流を探る意味では、学問的に、一方では民俗学などというものもありますけれども、考古学が最も中心的な学問分野の一つでございますので、そのお話を通じて考えてみたいということをお願いしたわけでございます。まあまたま、などと申し上げると大へん不敬になりますが、先帝陛下が亡くなられて、御大喪の儀が行なわれた直後でもありましたので、そういうことに関

連して、いろいろお話をいただきました。大へんありがとうございます。

第一回の『神道文化』の開始には大へんふさわしい話題であつたのではなからうかと思っております。どうもありがとうございます。

(平成元年二月二十七日 大神宮会館マツヤサロンにて)

